

我が平成日記雑感

一日記について少し考える

小林 正知(応化会)

1. はじめに

平成12年(2000年)の年末は20世紀最後の年末であると共に、40年余り続いた私のサラリーマン生活の終焉の時でもあった。これからは、仕事も学業も無い、物心がついてから初めて経験する毎日になるのだと思うと甚だ不安な気分になった。こめ時何故か、昔、中学2年の時、1年間だけ日記を書いたことがあり、このことを作文で、「来年も日記を書こうと思う」と書いたところ、先生に褒められたことを思い出して、「そうだ、きっと毎日閑になるから日記を書こう」と思うに至った。早速、急ぎ、事務用品の「イトー屋」に行き、高橋書店の日記帳を買って求めた。こうして私の日記は平成13年の1月1日に始まり、以来16年に亘り同じ日記帳で続けられている。

2. 日記を書くにあたって

日記を書き始めるにあたって、どのような日記を書くべきか、そもそも日記とは如何なるものであるか、等々のことを考え出して、まず文春新書 鴨下信一著「面白すぎる日記たち」(逆説的日本語読本)を読み、以下文中これの記述を引用させて貰ったり、これの記述をヒントにして、私なりに色々な事を調べたりした。日記を書く上でまず問題になるのは、秘密と云うことである。人間は誰でも他人には絶対に知られたくない秘密がある。妻と云えども他人である。これは人間の尊厳に関わることだから致し方ない。日記の秘密を守るにはどうすれば良いか、古来次ぎの様な方法が考えられていた様だ。

- (1) 鍵つきの引き出しに保管する。
- (2) 鍵つきの日記帳を使う。
- (3) 外国語で日記を書く。
- (4) 暗号で日記を書く

(1)はこの日記には秘密(隠し事)があると広言している様なものだから余り感心しない。(2)は昔はこんな物があったと聞くが今は多分こんな物は無いだろう。(3)は余程外国語に堪能な人ならいざ知らず、普通の人にとっては手数がかかりすぎて、永續きしないだろう。(4)はかつて(外国の話だが)永年に亘り暗号で書き続けた日記を残した人がいたが、後年これを完全に解読した人がいたと云うから、世の中にはまことに閑な人がいるものと感心するばかりである。結局余り適当な方法は無いので、私は平凡に言葉や表現でごまかすことにしている。

3. 人はいつから日記を書く様になったか

日本の古いことを調べるとまず、紀貫之の「土佐日記」が思い浮かぶ。然しこれは所謂紀行文であって、我々が書いている日記とは少し異なる。次は藤原道長の自筆の日記、「御堂閑白記」である。藤原道長は身分も地位も高く、政治の中樞にいて天皇家と関わりが深い人物であるから、個人の日記としてよりは、当

時の歴史の古文書としての価値がきわめて高く、日本のみならず世界中の研究者から注目されているので、国宝と同時にユネスコの記憶遺産に登録されている。道長は身分も地位も高い人であったが、関白と云う地位に就いたことは無かったので「御堂関白記」と云う名称は後の藤原家の人がつけたのだと云う。「御堂関白記」は藤原道長を父祖とする、五摂家筆頭の近衛家の宝物館である「陽明文庫」に保管されている。因みに、京都の「陽明文庫」の現在の建物は、近衛家第21代当主文麿氏(元内閣総理大臣)に依り建てられた。

次は藤原定家の日記「明月記」である。藤原定家は歌人としてはつとに有名であるが官位は余り高くなく、これが終生不満であったために和歌の道と「明月記」の様な文章に非常に努力したのだと云う。「明月記」は我々が書いている日記と殆ど同じ感じの文章であるので、これが我々の日記の最古の原型と云える。特に気候、天候に関する記述が丁寧でかつ一流の歌人らしく非常に格調が高いのが良い。「明月記」も後世の人がつけた名称で定家自身は生前これを「愚記」と呼んでいたと云う。「明月記」は藤原定家の子孫である京都の冷泉家の「時雨亭文庫」に保管されている。「時雨亭文庫」にある定家自筆の原本はすべて国宝になっている。冷泉家は貴族としての身分は余り高くなかったため、明治維新の時に天皇に従って東京に移る必要が無かったために、戦災を免れたのは幸いであった。

4. その後のさまざまの日記

日本人は日記と云うものが好きらしく、多くの人、特に政治家と小説家など所謂物書きと云われる人たちの日記は数多く知られている。特に物書きの日記は興味深いものが多い。樋口一葉は短い生涯の中で、貧しく苦しい生活を淡々と書いているが、後にこれは名文と高く評価されている。

次に、正岡子規の闘病記とも言うべき。「仰臥漫録」も面白い。「洋紙本やら端本売って見たところで、書生の頃べたべたと擦した獺祭書屋蔵書印を誰かに見られるも恥かきなり」とある。獺祭とは(本当か否かわからないが)獺は獲った魚を食う前に一度目の前に並べるそうで、転じて、物書きが辞書や参考資料を目の前に並べて文章や詩歌を推敲するさまを獺祭と言うようになり、子規の蔵書印もこれに習ったと思われる。子規は病床にあって余命幾許も無いことを知りながら。

(1) 新しい俳句(写生句)の普及

(2) 日本語の改革

と云う2大テーマに取り組み、特に(2)は(1)以上に非常に努力したが、案外これは余り知られず、俳句の業績ばかりが有名になったのは少し皮肉であった。

ついでに、清酒「獺祭」について少し触れる。数年前に発売されたこの酒も、子規のあの文章から命名されたのだと云う。この山口県の酒は、製造工程に杜氏が居らず、温度、時間、数量などはすべて、計器コントロールに依り製造されるのが、一大特徴だと云う。この酒は発売当初は大ブームになって、入手が非常に困難であったが、今は左程でもないようだ。

この他、明治以降の物書きとしては、徳富蘆花。石川啄木、谷崎潤一郎、大宅壮一、山田風太郎などが立派な日記を残している。

5. 戦争と日記(1)

平成17年(2005年)は戦後60年と云うことで、N.H.K.は「60年前の今日」と云う番組を企画した。僅か15分程度の短い番組で、内容は(1)その日の出来事と新聞記事(2)著名人の日記を紹介するものであった。

私は関心を持って殆ど毎日見ていたが、特に印象に残っているのは、3月某日の細川某と云う人の日記である。この人の肩書きは、近衛文麿首相秘書官とあるから、恐らく、元内閣総理大臣、細川護熙氏の縁戚の方ではないかと思われる。

日記に依れば、3月の東京大空襲の後の被災地の視察と云う事で、軍の高官が車で被災地に乗りつけ、車から降りたとたん、被災者に取り囲まれて、「お前らの所為で俺たちはこんなひどい目に遭っているんだ。一体どうして呉れるんだ」とばりざんぼうを浴びせられて、ほうほうの態で逃げ帰ったと云う。要するに、この時すでに、官民共に日本の敗勢は必至との認識が一致して、軍の威光などとっくに無くなっていたことが良く解かる。

6. 戦争と日記(2)

永井荷風と高見順は日記の二大作家と云われている。

永井荷風の日記、「断腸亭日乗」は1917年(大正6年)から書き始めて、死の直前の1959年(昭和34年)まで書き続けた。これは、非常に名文と高く評価されて居り。特に昭和20年3月9日の東京大空襲と8月15日の終戦の日の記述は良く紹介されている。「断腸亭日乗」は、映画や芝居でよく知られている「墨東奇譚」の下書きなどと云われているが、それを思わせる所が諸所見える。

『墨東奇譚』は主人公の小説家(永井荷風の分身と云われている)が戦前の色町、玉の井に通っている内に、ここの馴染みの女といつしか互いに恋心を抱くようになったが、東京大空襲で玉の井が戦災に遭って、女が行方知れずとなり悲恋に終わると云う話である。

高見順の「高見順日記」も高見順の代表作として高く評価されている。『高見順日記』は1941年(昭和16年)から書き始めて、1945年分(昭和20年分)は『敗戦日記』、1946年分(昭和21年分)は『終戦日記』と云われている。高見順は、特に終戦前後からは自身ことだけでなく、当時の社会についてこれの解説、意見、論評などをかなり詳しく書いている。高見は日記を大学ノートに書いていたが、これはかなり長文になっている。これは当時の世相を知る上で貴重な資料と云われている。

この他にも多くの作家が戦争或いは終戦、敗戦などについて書いているので、日本文学の研究者ドナルド・キーンはこれに着目して『日本人の戦争 作家の日記を読む』を著している。

7. おわりに

はじめに記したように、私は平成13年(2001年)1月1日より、つまり21世紀のはじまりと共に日記を書き始め、以来16年間同じ日記帳で書き続けている。

或る時から何故か、余白の部分も全部日記帳1頁を書き尽くすことにしてしまった。1日分約400字になる。これは案外面倒なことである。勿論、自身のことについては大して書くことがない日がある。こう云う日は私は、政治、社会、或いはスポーツ、芸術などの感想、意見、評論などを書いて、兎に角1頁全部を埋めることにしている。

さて、この、我が平成日記はいつまで続くか。毎日、食事をする、晩酌をする、入浴をする、本や新聞を読むなどと同様に、日記を書くことは、生活を構成する重要な一つになってしまった。

これがいつまで続けられるかは、私の健康寿命にかかっている。健康寿命のための闘いは苦しくもあり、楽しくもある毎日である。(2016. 8. 2記)